

平成30年3月15日号 「森のひと言」

—成熟のまちづくりは健康から—

3月1日、明け方から強風が三田市内に吹き荒れました。「春一番」です。昨年より9日遅いようです。厳しい寒さが続いた今年の冬もようやく終わろうとしています。三田の里山も少しずつ春めいてきます。

市制60周年という節目の今年は、「成熟のまちづくりへのスタートの年」です。さまざまな取り組みを始めていますが、その一つに「三田の健康元年」ということで「健康」や「スポーツ」に関する新たな取り組みを始めていきます。子どもから高齢者まで、全ての市民が自らの「心と体」の健康づくりに取り組むことをサポートしていきます。例えば、健康づくりへの取り組みによりポイントがたまるマイレージ制度や(仮称)ファミリー・スポーツ・カーニバルをきっかけに、家族や地域で楽しく健康づくりに取り組んでいただければと願っています。

3月4日の「さんだノルディック・ウォーキングフェスタ2018」では、約500人の参加者とともに、早春の里山でのウォーキングを楽しみました。三田は市街地の近くに緑豊かな自然があります。アウトドアの健康づくりには最適の地です。成熟のまちづくりは、年齢や障害の有無などに関わらず、市民誰もが、自分に合った「健康づくり」に参加し、いつまでも心と体が健康でいられるように、地域ぐるみで取り組むところから始まるのではないのでしょうか。

平成30年2月15日号 「森のひと言」

—未来の三田を担う若者へ—

2月3日、市内6校19人の高校生が参加し、市役所6階の議場で第3回高校生議会を開催しました。私をはじめ市の幹部に、日常生活から感じる地域の課題についての鋭い質問や、三田のまちづくりについての斬新な提案をいただきました。今回は、綿密な準備の機会を設けたこともあり、再質問が相次ぎ、答弁者が緊張する場面もありました。今後とも未来を担う若者には政治や社会への関心を高めてもらうとともに、三田への愛着を深めてもらう機会をつくっていきたいと思います。そして三田で学ぶ全ての高校生が「進取の精神と共生の心」を持つ人間へと成長してくれることを願っています。

今私から、高校生をはじめ若者に伝えたい言葉があります。それは、約80年前に少年少女向けに発行された『君たちはどう生きるか』(吉野源三郎著、株式会社マガジンハウス)という本の中の言葉です。その本の最終章に、主人公のコペル君が次のように書きつづっています。「僕は、すべての人がおたがいによい友だちであるような、そういう世の中が来なければいけないと思います。人類は今まで進歩してきたのですから、きっと今にそういう世の中に行きつくだろうと思います。そして僕は、それに役立つような人間になりたいと思います。」当時、戦争へ進んでいった日本の中での良識ある言葉として大切にしたいメッセージです。

平成30年2月1日号 「森のひと言」

—交通の結節点を活かして—

最近、第二テクノパークを中心に三田への進出を計画しておられる企業の方々とお会いする機会が多くあります。さまざまな業種の方々が異口同音に言われるのが「三田は、高速道路の結節点であり企業立地の面で好条件にある」と。このような声を踏まえ、(1)立地面での優位性を活かしたさらなる企業誘致の推進や進出した企業の活動支援に努め、生活・産業都市への転換を加速させたいと考えています。これからも私自身が積極的にトップセールスに努めていきます。さらに、

(2)教育の面でも三田の持つ「交通の結節点」という優位性を活かして、三田の学校で学ぶ若者が増えていくのを願っています。そのためにも三田駅や新三田駅からの交通アクセスを改善するとともに、駅周辺のにぎわいを創出していかなければなりません。また、(3)観光面でも従来からの日帰り観光に加え、交通の利便性を

活用して神戸や大阪の都市観光とセットにした体験観光などでインバウンド(訪日外国人)も含めて集客を増やすことも可能ではないでしょうか。

三田は、古くから、摂津、丹波、播磨の結節点にあり、農業を中心とした経済的豊かさと独特の文化・風俗に恵まれてきました。こうした三田の魅力を活かしながら、市内外の英知を結集して、時代の流れを先取りするような新産業の創出に努めてまいります。

平成 30 年 1 月 15 日号 「森のひと言」

—新成人に伝えたいこと—

今から 45 年前(昭和 48 年)に新成人になったM君は、45 年後の未来のM君に三つの質問をしました。「あなたの 45 年間にわたる社会生活経験から、(1)人生において幸せを感じたのはどんなときでしたか？(2)社会生活において最も大事なものはなんだと思いましたか？(3)人生において成功とは何ですか？」

未来のM君は答えました。「(1)人生で幸せだと感じたのは、家族の愛情を感じたときや、友人・上司部下との間で信頼関係を感じたときだよ。(2)社会生活で最も大事なものは、小さなことでも、自分のためではなく、他の人のために、社会のために勇気を持って行うことを積み重ねていくことかな。(3)人生の成功は、金持ちになることや高い社会的地位に就くことではないよ。『自分の物語』を家族や友人に語れるような生き方ができたら、成功した人生ではないだろうか」

答えはそれぞれあると思います。

今年の三田市の新成人は 1 3 9 6 人。変化の激しい時代が続きますが、「進取の精神」と「共生の心」を持ってこれからの人生を精一杯生き抜いてください。応援しています。

平成 30 年 1 月 1 日号 —新しい風 三田と共に—

新年、あけましておめでとうございます。

今年が、市民の皆さんにとりまして希望に満ちた年になりますよう、心からご祈念申し上げます。

今年が、市制施行 60 周年です。60 年を意味する「還暦」は、「第二の誕生」という意味があるようです。今年が「成長してきたまちから成熟したまち」への誕生の年でもあります。「成熟したまち」は、人々が支え合いながら共に心豊かに生きる「共生のまち」でもあります。そして (1)市民一人一人がお互いの人権を尊重しコミュニティを通じて共に生きる「人と人との共生」、(2)祖先から受け継いできた豊かな里山の自然や先人が築いてきた街中の自然と共に生きる「人と自然との共生」、(3)市内の多様な地域のそれぞれの歴史や文化を尊重しながら、市民全てが共に生きる「地域と地域との共生」があると思いますが、これら 3 つの「共生」が「成熟したまち」には欠かせません。

今年が、明治維新から 150 年でもあります。当時の日本は、明治という新しい時代に対する希望とともに不安が各地で見られた、まさに「夜明け前」でした。三田市の人口減少と急激な高齢化に伴うまちの変化に不安を感じている市民もおられるでしょうが、「成熟したまち」への夜明けを目指して、さまざまな三田の改革を着実に進めてまいります。ご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

2018 年を、市民の皆さんと共に「新しい風が吹く成熟したまち」を創り上げていくスタートの年にしてまいりたいと決意しています。

平成 29 年 12 月 15 日号 「森のひと言」

—風の広場での対話を楽しもう—

12月1日、今年度の「サンタ×三田プロジェクト」がスタートしました。プロジェクトのオープニングは三田駅前の広場に続き、三田市役所庁舎前の「風の広場」で行われました。寒風が吹き抜ける中でしたが、透明感のある歌声が流れクリスマスムード溢れる時間を多くの来場者に楽しんでいただきました。この「風の広場」は、今春、多くの市民や市外の方々に「憩いと出会いと賑わい」の広場として親しんでいただきたいとの願いから誕生しました。広場の中央に、さんだ夢大使である新宮晋氏作成のモニュメント「星の対話」が置かれています。10月に起きた台風で強風を受けても「悠然」とたたずむ姿には感服しました。

毎日、仕事の合間に市長室の窓から、このモニュメントとそれを見上げながら「対話」している皆さんの姿を見るのを楽しみにしています。私の数少ない「リフレッシュ」の時間です。ぜひ、多くの方々に「風の広場」を訪れていただき、「星の対話」との出会いを楽しんでいただきたいです。



星の対話

平成 29 年 12 月 1 日号 「森のひと言」

—風のまちを 風を聴きながら、走り抜けよう—

12月17日、三田国際マスターズマラソンが開催されます。5383人のランナーから申し込みをいただきました。マラソンブームで多くのマラソン大会が開催される中で、三田を選んでいただいたことに深く感謝します。私自身、57歳のときから始めた趣味のランニングですが、これまで10回のフルマラソン大会、15回のハーフマラソン大会にチャレンジしてきました。「マラソン大会で走る喜び」は3つあると感じています。①完走した時の達成感 ②開催地の素敵な風景 ③暖かい開催地の人々のホスピタリティ(おもてなし)です。その中でも、開催地の人々のホスピタリティが、最も大きな喜びでした。例えば、平成22年の東京マラソンのとき、疲れ切った私に、一人の沿道の応援者が広げて見せてくれた紙に書いてあった言葉を忘れません。「ゴールは必ず来る。最後まで頑張れ」という言葉に大きな勇気をもらいました。

寒風が吹き抜ける朝、県立有馬高等学校前のスタート地点に全国から多くのランナーが集います。ランナーの皆さんには、「風のまち三田」を、「風の声(多くの市民の皆さんの応援の声)」を聴きながら、走り抜けてほしいと願っています。また一つ素敵な思い出が生まれることを期待しています。

平成 29 年 11 月 15 日号 「森のひと言」

—家族の日に、家族と地域を考える—

先日、市内の小学校の校長先生から「創立30周年を記念した人文字の航空写真と小学校を囲む地域の航空写真」を送っていただきました。私の三人の子どもが同校でお世話になったご縁もあり、私も「人文字」に加えていただきました。いただいた写真を見ていると、当時の地域の姿や日々の生活が鮮やかによみがえりました。「我が家のファミリーヒストリーの一コマ」として大切な思い出です。自然豊かな三田で「家族」として豊かな人生を共有できた幸せを改めて感じます。

しかしながら、「家族と幸せを共有できない」家族も社会が複雑化・多様化していく中では多くなっています。児童虐待や配偶者への暴力など、家族内の悲劇が少なからず起こっています。人口減少・超高齢化・少子化が急速に進む三田市でもそのような悲劇が生み出される危険が潜んでいます。「家族の孤立化への対応」が重要な地域課題です。家族が孤立しないように地域が早く兆候を察知し、悲劇を防ぐ仕組みをみんなで構築していかなければなりません。

三田市では、平成5年から11月の第三日曜日を「三田市家族の日」(今年は19日)を設け、家族の良さを実感し、家族の在り方や家族と地域の関わりをみんなで考える機会にしていきたいと願っています。市としても地域と協力しながら「全ての家族」を応援していきます。

平成29年11月1日号 「森のひと言」

まず初めに、超大型の台風21号が10月22日から23日にかけて三田市に接近する中、本市では水防警戒本部を設置し、警戒を強めておりました。しかし、市内において多くの被害が発生したことは誠に残念であり、被害に遭われた方々に対しまして心よりお見舞い申し上げます。

さて先日、衆議院議員総選挙などが行われました。近年の三田市では、身近な市長選挙や市議会議員選挙よりも、国政選挙の方が投票率が高くなる傾向が見られます(今回の総選挙では約52%、昨年の参議院議員選挙では約57%、一昨年の市長選挙では約42%、昨年の市議会議員選挙では約49%)。

国政での民主主義も大切ですが、「地方自治は民主主義の学校」と言われているように、身近な「成熟のまちづくり」を進めるためには、地方自治での民主主義を成熟したものに育てていかなければなりません。そのために、まず身近な地方選挙への関心を高め、投票率を向上させることが大切です。本市では「三田市高校生議会」をはじめ、昨年若者への啓発を進めています。

また、成熟した民主主義は、議会政治だけで成り立つものではなく、市政に関する情報をできる限り公開し、その情報をもとに市民の皆さんが、政策を直接提案できる仕組みを作っていくことが重要です。さらに、未来まちづくりミーティングなどの「タウンミーティング」に、より多くの市民の皆さんに参加いただき、建設的な議論ができるように充実させる必要があります。市民の皆さんのご理解を得ながら早期の実現を目指してまいります。

平成29年10月15日号 「森のひと言」

—多様性を尊重するまちづくりを—

10月1日、郷の音ホールで「第67回近畿ろうあ者大会」が、900人を超える関係者をお招きし盛大に開催されました。午前の式典等の後、午後は近畿の6市の市長らによる「各市における手話言語条例の特徴及び今後の抱負」と題したパネルディスカッションが行われました。

私も、今年4月から施行している「三田市みんなの手話言語条例」の制定経過や理念に加え、三田市役所や三田市民による取り組みを紹介させていただきました。その中で、多くの聴衆に感動を与えたのが、市内のある小学校の取り組みでした。その学校では、手話を交えながら校歌と愛唱歌を上級生が一年生に教えるものでした。かつてその学校に聴覚障害のある児童がいたことから始まった取り組みが、毎年、続いているとのことでした。

私は、「人と人が共生するまち 三田」を目指して市民の皆さんと一緒に成熟のまちづくりを進めていますが、それは障害の有無などに関わらず、一人ひとりの多様性を尊重しつつ誰もが住み慣れたまちで、心豊かに生活をするために共に支え合うまちづくりを目指すことです。市内のある小学校の取り組みのように、さまざまな形で「多様性を尊重する学び」が市内の子どもたちに広がるとともに受け継がれていくことを期待しています。

平成29年10月1日号 「森のひと言」

—新しい風、三田と共に—

三田市は来年、市制施行60周年を迎えます。60年を意味する「還暦」には、干支が生まれ年に戻る、すなわち「第二の誕生」という意味が込められています。来年は、新しい三田が生まれる節目の年と言え

るでしょう。

昭和 48 年からの北摂三田ニュータウン開発もあり、今や人口 11 万人を超えるまちに大きく「成長」しましたが、人口減少と急激な高齢化が進んでいます。これからは「成熟」したまちづくりへと大きく転換していかなければなりません。

三田市の還暦を、市民総がかりで祝うことはもちろんですが、先人たちが築き上げてきた「三田の魅力」を再認識し、「三田の未来」をみんなで考え行動するきっかけにすることが大切だと考えています。

すでに、三田市制施行 60 周年記念事業のキャッチコピーは「新しい風、三田と共に」に決定しています。市民の皆さんには、このキャッチコピーから「風のまちという三田のイメージを大切にしよう。三田を変える新しい風を吹かせよう。市民が力を合わせて三田の未来を切り拓いていこう。三田が変わるだけでなく、自分自身も変わっていこう」というメッセージを少しでも感じとっていただきたいと願っています。

平成 29 年 9 月 15 日号 「森のひと言」

—いつまでも輝く笑顔を一

9 月 18 日は「敬老の日」です。今年は、対象となる 75 歳以上の人が 11,342 人おられます。戦中、戦後を家族や社会のために尽力され、今の豊かな日本の礎を築き上げて来られたことに、心から敬意と感謝の意を表します。さまざまな機会に高齢者の皆様の「笑顔」を拝見するたびに、子どもたちには「優しさ」をいただき、若者をはじめ多くの市民には「元気」をいただいています。

敬老の日は、戦後、兵庫県内で始まり全国に広がったものですが、その頃と大きく社会環境が変わり、三田でも、平均寿命が 80 歳を超える超高齢社会になってきています。そして超高齢社会での大きな課題としては、(1)介護体制の充実、認知症対策の強化や高齢者世帯の孤立化防止など (2)元気な高齢者のための健康づくり、生涯学習などの生きがいづくりや就労などの活躍の場づくりです。

市では、限られた財源の中で、高齢者対策をこれらの課題解決に集中することにしました。そのため、申し訳ありませんが、来年度から敬老会への補助を廃止させていただくことになりました。苦渋の決断であることをご理解いただくとともに、市民の皆様への説明が十分ではないことについてお詫び申し上げます。今後は、二つの課題解決のため、全力で取り組んでまいります。

三田の高齢者の方々が、いつまでもお元気で、毎日をお豊かにお過ごしいただき、「輝く笑顔」を見せていただくことを強く願っています。

平成 29 年 9 月 1 日号 「森のひと言」

—美食のまち「三田」を目指して—

三田は、「豊饒な大地と寒暖差のある気候に恵まれた農産物、三田肉などの豊富な食材を活用した料理やスイーツが楽しめる『食の宝庫』」であるとよく言われます。市民の皆さんには、地元の食材を通じて三田の魅力の再認識を、市外の人たちには、一人でも多く三田を訪れていただき、「食」を通じて三田の魅力を知って欲しいと願っています。

秋は「食の宝庫三田」の魅力が一段と輝く季節です。9 月の「さんだ秋の観光と味覚まつり」、10 月の「三田バル」や 11 月の「さんだ農業まつり」など、三田の「食」に関する多くのイベントが予定されています。また新たに 11 月 3 日に実施する「三田ビール検定」では、川本幸民をはじめビールや三田に関する知識を試すだけでなく、ビールとよく合う三田の食材に舌鼓を打っていただく絶好の機会です。

今、地場産レストラン構想を核とした「美食のまち三田」を目指したまちづくりを進めるため、市役所内の若手職員を中心に議論を進めています。市民の皆さんも秋の夜長、ビールを片手に三田肉や三田産野菜を食べながら、ワイワイガヤガヤと三田のまちづくりについて語り合っていいただければ幸いです。

平成 29 年 8 月 15 日号 「森のひと言」

—就任 3 年目を迎えて

「よそ者、ばか者、若者」—

—昨年 8 月 8 日に第七代三田市長に就任して 2 年が経過しました。この間、「三田市の目指すべき姿」を、市職員との議論や市民の皆さんとの語らいを通じて模索してきました。そして、三田版総合戦略や第 4 次三田市総合計画後期基本計画などさまざまな計画に目指すべき姿を短いキーワードに思いを込めて表現してきました。例えば「成長から成熟するまち三田へ」、「学びの都」、「住宅都市から生活・産業都市へ」などです。今まさに、キーワードに込めた思いを実現するため、具体的な政策を進めているところです。

地域活性化には、生まれ育った人たちの郷土愛に加え、「よそ者、ばか者、若者」の力と知恵が必要であるとよく言われます。

私は、市長としての 2 年間、克服すべき課題をこれまでとは違った新たな視点や考え方で掘り起こしてきました。そのため、市職員や市民の方々が戸惑ったりしたこともあったようです。しかし三田市政に携わった経験のない「よそ者」だからこそその新しい指摘もあったと自負しています。

今、もっとも重要な課題は、危機的状態にある市財政を立て直す「行財政構造改革」の着実な実行です。これまでとは違う大胆な改革であり「ばか者」と言われるかもしれませんが、未来への責任感を持って粘り強く遂行していくつもりです。

そして、これからも進取の精神あふれる「若者」のように、新しい市政の課題に挑戦し続け、持続可能な市政運営を実現するため、市職員はもとより、市民の皆さんと共に目指してまいります。

平成 29 年 8 月 1 日号 「森のひと言」

—三田の夏、まつりの夏—

7 月 16 日の高平小学校区の夏まつり「ふれあい大会」を皮切りに、市内各地で小学校区ごとのまつりがスタートしました。

今夏はことのほか暑い日が続くようですが、多くの方々にまつりを楽しんでいただきたいと思います。私もできる限り各地の夏祭りに参加させていただきます。

参加させていただいていつも感じるのですが、それぞれの小学校の歴史に違いがありますが、どの小学校も卒業生だけでなく地域の皆さんが深く愛着を持っておられます。小学校は地域コミュニティの核であることを改めて認識しています。

また、各地のまつりに参加させていただくと、それぞれの地域によって地域の個性が感じられます。地域の歴史や伝統の違いに関わらず、地域の「まつり」には、地域の人々のエネルギーを集め地域を元気にするとともに、その地域の個性を創り出す効果があるのではないのでしょうか。地域の個性がたくさんあることが三田の魅力の一つです。

8 月 5 日には、39 回目の「三田まつり」を開催する予定です。多くの市民の皆さんの協力を得て「三田市民のエネルギー」、「三田の元気」および「三田の多彩な魅力」を、夜空に舞い上がる花火のように大きく発信し、市民みんなで「三田まつり」を盛り上げていきましょう。

平成 29 年 7 月 15 日号 「森のひと言」

—里山を生かして成熟のまちづくりを—

7月1日、三田市内の皿池湿原が念願の「市指定文化財(天然記念物)」に指定されました。また、7月4日には、新たに設置した「里山の保全・活用に関する懇話会」の1回目の意見交換が行われ、私もメンバーとして参加いたしました。

今後、三田市が「成長するまち」から「成熟するまち」へと転換するなかで、日本のふるさとの原風景が残る三田の里山が、「市民に愛される風景」とするとともに「環境活動のフィールド」であること、それに加え、成熟したまちにふさわしい「新たな三田ブランド」となるような仕組みや事業について懇話会で意見交換を行い、9月には提言がまとめられる予定です。その後、提言を参考に新たに設置する附属機関で、条例(案)を検討することとしています。

私は、里山の保全・活用は、「人と自然の共生」という個人レベルのテーマに加え、三田の「まち(農村地域だけでなく既成市街地、ニュータウンなども含む)の再生」という地域的なテーマの両面から検討する必要があると考えています。この条例が、市民と里山の新しい関係を構築し、次世代に美しい里山を引き継ぐ、そんな先進的な成熟のまちにふさわしい特色ある条例となるよう検討してまいります。

平成 29 年 7 月 1 日号 「森のひと言」

—伴走者として共に生きる地域に—

この度、念願であった三田市障害者総合相談窓口を開設することになりました。ここを拠点として、障害のある人を中心に地域での支え合いの「輪」が広がっていくことを期待しています。限られた市の財政状況ですが、障害のある方々の自立への支援をはじめ、保護者やボランティアの方々をサポートする仕組みを一つひとつ創り上げていかねばなりません。さらに障害のある人もない人も安心して暮らすことのできる共生社会を目指して「(仮称)三田市障害者差別解消条例」の検討を進めていきます。

「障害のある人もない人も安心して暮らすことのできる共生社会」とは、どのような社会でしょうか。さまざまな考え方がありますが、私は「障害のある人の心に寄り添うとともに、障害のある人のチャレンジを支え合いながら共に生きていると感じ合える社会」ではないかと考えます。私事で恐縮ですが、4年前の福知山マラソン大会に参加したときに、視覚障害者の方に寄り添って伴走されているランナーの姿を見て心を動かされました。その後、三田市内で開催された伴走ボランティアの研修会に参加した際、障害のある方のメンタルの部分にも心を寄せながら共にゴールすることの素晴らしさを知りました。障害のある人を支えるだけでなく障害のある人のチャレンジから元気をいただく、そんな地域社会づくりを目指していきたいと思っています。

平成 29 年 6 月 15 日号 「森のひと言」

—三田に防災文化を—

先日、全国市長会から「被災地からおくるメッセージ—災害時にトップがなすべきこと」という冊子をいただきました。東日本大震災、熊本地震、最近の大水害などの被災地の市町村長の貴重な体験や教訓を踏まえ、(1)平時の備え、(2)直面する危機への対応、(3)救援・復旧・復興への対応についての教訓が述べられており、しっかりと胸に刻み込まねばと思っています。

本市は、幸い近年に大きな災害がなかったことから、多くの市職員は大災害時の救援・復旧・復興を体験していません。そこで、職員を石巻市、熊本県などに派遣し、被災地支援を通じて職員の育成と災害対応のノウハウの蓄積につなげています。また今春、兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科に職員を派遣し、体系的な防災・減災に精通した職員を育成するとともに、全ての職員もさまざまな訓練を

通じて意識改革を進め市役所内に「防災文化」を創り上げていきます。

今後は、市役所と地域が密接な連携を図りながら、「地域の安全・安心は地域で守るという防災文化」を育てていただきたいと思います。そして「自分の命は自分で守るという防災文化」を、子どものときから家庭や学校、地域で育てていかなければなりません。市民の皆さんのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

平成 29 年 6 月 1 日号 「森のひと言」

—進取の精神—

私の好きな言葉の一つに「進取の精神」があります。その意味は、従来の慣習にとらわれず進んで新しいことをやろうとすることです。幕末・維新の三田には、進取の精神を持った人物がたくさんおり、そのモデルと言えるのが幕末の蘭学者川本幸民ではないでしょうか。幸民は蘭書をもとにビールやマッチ、写真撮影などを日本人で初めて研究し、「化学」という言葉を広めた人でもあります。この他にも、第 13 代三田藩主であった九鬼隆義は、慣習にとらわれず有能な人材(白洲退蔵、小寺泰次郎など)を登用し、危機的状況にあった財政の立て直しなど藩政改革を断行し、開明的な藩運営を推進しました。

今年は神戸港 150 周年、来年は明治維新 150 周年(兵庫県政 150 周年)に当たります。「進取の気風の富んだまち」として三田が輝いた時代があったことを、多くの市民に再認識していただき、市外の方々にも知っていただきたいと思います。特に子どもたちには「ふるさとの偉人たち」を学んで、ふるさと三田に誇りを持ってもらいたいと思います。また、若者には、激動の幕末・維新の三田の物語を知ってもらい、大いに刺激を受けてほしいです。

暑い日が続きます。三田ビール検定公式テキストを片手に、ビールを飲みながら「進取の精神あふれる幕末・維新の三田」を語り合っていただければいかがでしょうか。そして、11月3日の「三田ビール検定」にぜひチャレンジしてください。

平成 29 年 5 月 15 日号 「森のひと言」

—子どもの「感動・夢・気概」を育むまちへ—

昨年 10 月に多くの方々のご協力によって「こうみん未来塾」が誕生しました。私は塾長として三つの目標を掲げ、事業を推進しています。

第一に、科学技術に親しむさまざまなプログラムを通じて素直な「感動」を子どもたちに覚えてもらいたいと思っています。第二に、感動体験から、将来への大きな「夢」を育んでもらうことを期待しています。例えば、ノーベル賞を受賞するような世界的な科学者を目指す子どもが三田から出てくればとても素晴らしいことです。第三に、すべての子どもたちが、それぞれの夢に向かって、多くの困難にも負けずチャレンジしていく「気概」を持って人生を歩んでももらいたいと思っています。

「こうみん未来塾」は、現在、県立人と自然の博物館、関西学院大学、湊川短期大学、麒麟ビールおよび J A 兵庫六甲などのご指導・ご支援を受けながら、地域の皆さんと市職員が「公民協働」の考えのもと事業を運営しています。

これからは、子どものことが大好きで職業経験豊富なシニアの皆さんに、指導やプログラム開発に加わっていただきながら、「のびのびとした体験学習の場」「ほのぼのとした世代を超えた学びの場」を広げていきたいと思っています。

平成 29 年 5 月 1 日号 「森のひと言」

—「生涯にわたる学び」の機会を—

昨年度から検討を進めてきました本市の今後 5 年間の教育施策の基本方針をまとめた「三田市教育大綱」を策定しました。大綱では「夢を育て、人を育む学びのまち 三田」を基本理念として、三田の未来を担う子どもたちの育ちと学びを地域の皆様のご協力をいただきながら進めることや、学校の適正規模・配置や幼保一元化など重要な課題を検討項目として盛り込んでいます。今後、検討項目につきましては、市議会や市民の皆様にご意見をいただきながら一定の方向性をまとめていきたいと考えています。

また、大綱では高齢者をはじめ多世代にわたる生涯学習の環境の充実についても重点的に取り組むべき項目として掲げました。

「学び」を通じて、市民一人ひとりが生きがいを見つけ、多くの市民が心を通わせるとともに、地域に関わりをもっといただく地域づくりを積極的に進めていきます。特に、高齢者の皆様には、「生涯青春の心意気」と「子どものような純粋な好奇心」を持って、「学び」を始めていただきたいと願っており、現在、市では「さんだ生涯学習カレッジ」や「生きがい応援プラザ(HOT)」などさまざまな「学びの機会」を提供しています。

今後も本市の個性あふれる各種高等教育・学術機関を活用した「多様な生涯学習の機会」を創出していきますので、ご期待ください。

平成 29 年 4 月 15 日号 「森のひと言」

人と人との共生

～人と人がつながり、支えあうために

現在、市では、市民の皆さんがいつまでも住み続け、市外から多くの方に移り住んでいただくために、子育て・教育環境の充実、良好な住環境の整備、多様な就業機会の確保などを行うことで、街のにぎわいを創出し、三田の魅力を発信しています。

これらの取り組みに加え、誰もが住みやすく三田が多くの人に「選ばれる都市」であるためには、人のつながりを大切にし、心のバリアがない「人と人との共生」を推進する政策が欠かせないと考えています。

「人と人との共生」を実現するためには、まず、互いの人権が尊重され、すべての人が寛容な心を持って多様な価値観やライフスタイルを尊重する地域文化をしっかりと根付かせる必要があります。市では「(仮称)三田市障害者差別解消条例」の制定など先進的な施策の実現を目指しています。

次に、限られた財源の中で、先進性と持続可能性のある社会保障システムを整備していくことが重要な課題であり、切れ目のない子育て支援策の推進や地域包括ケア体制の構築を進めています。

さらに、地域で力を合わせて安全・安心を守り、地域を元気にしていく新たなコミュニティの構築が不可欠なことから「(仮称)コミュニティ条例」の制定など、成熟社会に対応した新たな仕組みを検討していきます。

平成 29 年 4 月 1 日号 「森のひと言」

さらなる市役所改革を

～期待される市職員を目指して

29 年度は、①地域の創生 ②まちの再生 ③人と人との共生の 3 つを柱とした「成熟のまちづくり」を本格的に進めます。具体的には、第 4 次三田市総合計画後期基本計画や農業、教育などの主要な計画とともに、それらを下支えする行財政構造改革をスタートさせます。市民の皆様にも負担が伴う行財政構造改革を進めていくためには、改革を牽引する「私をはじめとする市役所職員」に対する信頼を得ること

が不可欠であると考えています。

そして、信頼を得るためには、一人ひとりの職員に「公務に携わる者としての高い倫理観」と「仕事に対する高い志」が求められます。その意味では、先日の市議会議員に対する不適切な発言は市民の信頼を損ねるものであり、そのような組織風土に気づけなかったことに市長として申し訳なく思っています。二度とこのようなことのないように、職員の意識改革・組織改革を今まで以上に加速させ、一日も早く高い倫理観と志を育む組織風土を作り上げていきます。

一方、この春には「成熟のまちづくり」に対応した組織改革と行財政構造改革を推進するため、また職員が最大限に能力を発揮できるよう適材適所の人事配置を行いました。さらに、職員のプロジェクトチームによる「新・三田市人材育成基本方針」のもと、職員一人ひとりが仕事と生活との調和にも配慮した「働き方改革」に積極的に取り組むこととしています。市民の皆様には、こうした市役所改革に期待していただくとともに、適切なお指導をお願いします。